

1433(永享5)年会津地震 ($M6.7$) の非実在性

建設省建築研究所国際地震工学部 石 橋 克 彦

(昭和 57 年 12 月 27 日受理)

Unreality of the 1433 Aizu Earthquake ($M6.7$) in Northeast Japan

Katsuhiko ISHIBASHI

International Institute of Seismology and Earthquake Engineering,
Building Research Institute, Ministry of Construction

(Received December 27, 1982)

TOKYO ASTRONOMICAL OBSERVATORY (1981) and USAMI (1975) are listing a historical destructive earthquake of magnitude 6.7 that occurred in the Aizu province in northeast Japan on November 7, 1433. However, the only basis of the earthquake is the total collapse of the Todera-Hachimangu Shrine due to violent earthquake motion which is described in an old book named "Todera-Hachimangu Ryakki Nagacho". In this paper reliability of the description has been examined and unreality of the earthquake has been concluded.

"Todera-Hachimangu Ryakki Nagacho" is a compiled material written more than 150 years after 1433 and, so, the reliability of its description on older times is generally low. On the other hand, there is another historical document concerning the Todera-Hachimangu Shrine called "Todera-Hachimangu Nagacho", which is a yearly record mainly on the shrine's ceremony and local happenings written year by year. Its original copy covering most part of the period between 1350 and 1635 is preserved in the shrine. This is the most reliable and basic material concerning the Todera-Hachimangu Shrine and its vicinity for the 14th to the 16th centuries.

In "Todera-Hachimangu Nagacho" there is no record about the collapse of the shrine in 1433. On the contrary, it contains a few reliable descriptions which conflict with seismic disaster in the province at that time. Thus, the collapse of the shrine due to an earthquake in 1433 has proved to be not an actual fact. Therefore, the 1433 Aizu earthquake of magnitude 6.7 should be deleted from Japanese historical earthquake catalogs.

§1. はじめに

「理科年表」昭和 57 年版 [東京天文台 (1981)] 地学部 <日本付近の被害地震年代表> によれば、永享 (えいきょう) 5 年 9 月 16 日 (グレゴリオ暦 1433 年 11 月 7 日^{註1}) に相模で M (マグニチュード) 7.1 の地震が発生し、同じ日に会津で $M6.7$ の地震があつたという。この会津の地震の震央は北緯 37.7° ・東経 139.8° (Fig. 1), 被害摘要は“会津塔寺 (とうでら) 八幡宮の建物皆倒れる。前の地震と同日、一応別の地震と考える”とされている。宇佐美 (1975) の「資料日本被害地震総覧」も同じ震央とマグニチュードを掲げ、“会津塔寺八幡宮の廻廊・拜殿・宝蔵・鳥居等、残らず倒れる。前の地震と同日、いちおう別の地震と考える”と

昭和 57 年 10 月 6 日発表

註 1) 「理科年表」には“6日”と印刷されている。

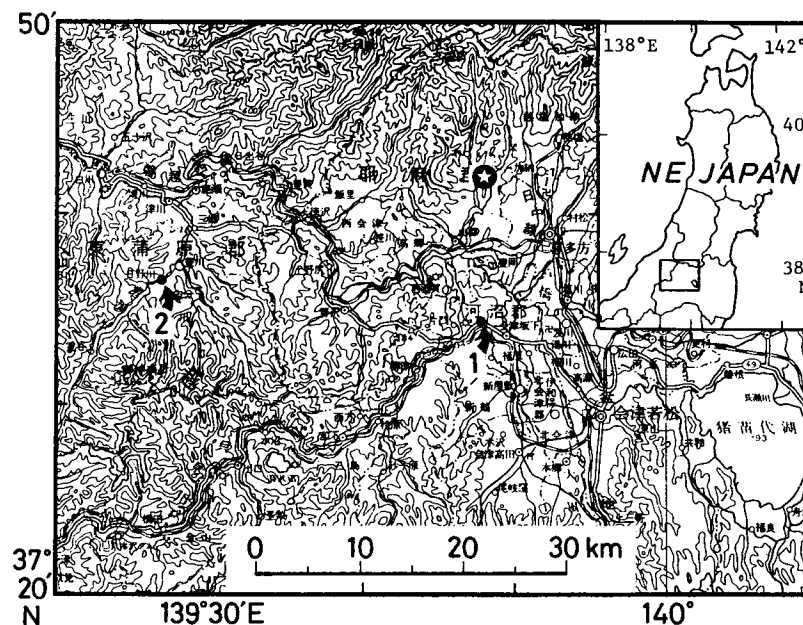


Fig. 1. Location of a destructive earthquake ($M6.7$) in the Aizu province in northeast Japan in 1433 listed in TOKYO ASTRONOMICAL OBSERVATORY (1981) and USAMI (1975) (star mark), whose unreality is discussed in this paper. 1, Todera-Hachimangu Shrine; 2, Takaide.

している。地震資料を宇佐美 (1975) によつて「日本の活断層一分布図と資料」[活断層研究会 (1980)] も、<44 新潟> 図幅の加納断層と会津盆地西縁北部断層 (ともに確実度 I) の近くに、この地震を図示している。

しかし、この会津の地震は、地震史料の吟味が不充分なために生じたものであつて、実際にはこのような地震は無かつた可能性が非常に強い。以下にこのことを述べる。

なお、塔寺八幡宮とは、福島県河沼郡会津坂下町塔寺の心清水 (こころしみず) 八幡神社のことである (Fig. 1 参照)。

§2. 従来の会津地震の根拠

永享 5 年 9 月 16 日に会津地方が強震に襲われたように記している史料は、現在のところ「塔寺八幡宮略記長帳 (とうでらちまんぐうりやくきながちょう)」だけである。これは「大日本地震史料」[田山 (1904)] に採録され、「増訂大日本地震史料」[武者 (1941)] に引き継がれている。その内容は、

永享五年九月十六日、日本国大地震、相州大山仁王首震落、遙谷底入、凡神社仏閣、上天公卿民家至迄、家倒山崩、水塞谷埋、死者多、十 (此か) 時會津塔寺邑正八幡宮御宮殿廻廊拜殿宝蔵華表^{註2}、凡不残震倒。

註 2) 華表=神社の鳥居。

というものである(武者(1941)では傍点の2字が抜けている)。なお、田山(1904)も武者(1941)も、“会津旧事雑考、会津土直考、並=同ジ”と註しているが、「会津旧事雑考」は寛文12年(1672)に会津藩士向井吉重が著した地誌であつて、いまの問題については史料価値が低い。「会津土直(くさ)考」は「国書総目録」(岩波書店)になく、筆者にはいかなる書物かわからないが、少なくとも本論の問題に関しては一等史料ではないと考えられ、以下を読んで頂ければわかるように、これを無視しても本稿の議論に支障はない。

さて、永享5年9月16日に鎌倉をはじめとする関東地方を大地震が襲つたことは、田山(1904)と武者(1941)、および都司(1979)に収録されている他の地震史料によつて確実であるが、田山(1904)は、「塔寺八幡宮略記長帳」の記す会津の被害も関東地方を襲つたのと同じ地震によるものとみなし、“相模、陸奥、甲斐諸国、地大=震と、鎌倉、会津、被害夥シ、是日、京都モ強ク震ヘリ”という綱文をたてた。大森(1913, 1919)も同様の見解を示し、武者(1941)も田山(1904)の綱文を踏襲した。しかし、武者(1950)は、塔寺八幡宮の被害は関東地方の地震とは別の地震によるものと考え、今村の規模等級I^{註3)}の会津地方の地震を考えた。最初に述べた「理科年表」や宇佐美(1975)は、この説を踏襲したものと思われる。

要するに、永享5年9月16日の会津地震の根拠は、「塔寺八幡宮略記長帳」が伝える塔寺八幡宮の地震被害だけである。

§3. 「異本塔寺長帳」

それでは、「塔寺八幡宮略記長帳」とはいかなる史料であり、問題の震害記事はどの程度の信頼性があるのだろうか。

国立公文書館の内閣文庫に「異本塔寺長帳(いほんとうでらながちよう)」という冊子本が架蔵されている(7冊、請求番号192函424号)。田山(1904)と武者(1941)に引用された「塔寺八幡宮略記長帳」がこの内閣文庫本「異本塔寺長帳」の一部分ないしはそれと同じ系統の本であることは、以下に述べるように、内閣文庫本の一冊目と二冊目の内題が「八幡宮略記長帳一上、二下」であつて、三冊目に該当する記事があることから、まず間違いない。そこで、この「異本塔寺長帳」の史料価値を検討しよう。

内閣文庫本「異本塔寺長帳」7冊は3つの部分に分けられる。第一の部分は第一冊と第二冊で、それぞれ「八幡宮略記長帳一上」、「八幡宮略記長帳二下」という内題をもち、天喜5年~建久9年(1057~1198)および正治元年~北朝貞和5年・南朝正平4年(1199~1349)のことを記している。第二の部分は第三冊~第五冊で、順に「八幡宮年日記長帳統一上」、「八幡宮年日記長帳統二中」、「八幡宮年日記長帳統三下」という内題をもち、それぞれ北朝観応元年・南朝正平5年~寛正5年(1350~1464)、寛正6年~弘治3年(1465~1557)、永禄元年~天正19年(1558~1591)について記している。第三の部分は第六冊と第七冊で、第六冊は無題であるが、第七冊は「統年日記下」という内題で、それぞれ文禄元年~寛永15年(1592~1638)と寛永16年~享保20年(1639~1735)のことを記している。これら7冊には「編脩地誌備用典籍」という朱印(江戸幕府の昌平坂学問所内に設けられた地誌編修取調所の蔵書印)がある。

註3) 激震区域(普通の木造家屋の倒壊率が1~2%以上の区域)の平均半径が10kmを超えないもの。最大震度は重力加速度の2~3割であろう。著しい断層は目撃されるに至らない。昭和6(1931)年西埼玉地震(M7.0)、昭和10(1935)年静岡地震(M6.3)などがこれにあたる[武者(1950)]。

文政5年(1822)に完成した「編脩地誌備用典籍解題」[刊本は、東京大学史料編纂所(1972~1979)]には“長帳略記二巻、二冊写本”、“長帳統年日記三巻、三冊写本”、“統年日記二巻、二冊写本”として掲載されているが、それぞれが上述の第一、第二、第三の部分にあたることは、解題や、内閣文庫本の表紙に記された原題から明らかである。

さて、いま問題にしたいのは第二の部分である。この部分の冒頭、つまり内閣文庫本第三冊の巻頭に“会津稲川庄塔寺八幡宮略記之弁”があり、それには、

(前略) 其間ヲ除置事ヲ懈(モノクサ)者ト耻テ不、残筆起天正十九年辛卯迄二百四十二年ノ間ヲ記録ス是年ニ至止

又自夫今宝曆壬申迄百六十二年ノ事ヲ記録ス自是以来後人可、記乎

と記されている。また、この部分の最後、つまり内閣文庫本第五冊の巻末には、

天正十九年辛卯十二月從五位下戸内宮司主殿頭源朝臣田中俊光

とある。これらのことから、この部分の内容は塔寺八幡宮の祠官田中俊光の手によつて天正19年(1591)に成立し、それが宝暦2年壬申(1752)頃に書写されて内閣文庫本「異本塔寺長帳」第三~五冊として残されたものと考えられる。「編脩地誌備用典籍解題」も、「長帳統年日記三巻」を源俊光(田中俊光)の撰としている。

結局、田山(1904)が問題の震害記事を引用した「塔寺八幡宮略記長帳」は、地震の時から150年以上ものちに作られた編纂物であることがわかつた。したがつて、この件に関しては信頼性が低く、その記事は十分に吟味しなければならない。

なお、田山(1904)は、「異本塔寺長帳」の第一の部分の内題のもとに第二の部分の記事を引用しているわけだが、これは、この本が前述のように3つの部分に分けられるといつても、一方では内容の時間的連続性のために一連のものともみなされたためであろう(田山(1904)は「異本塔寺長帳」からかなりの地震記事を引用しているが、その引用書名はまちまちである)。また、§5に述べるような状況から、田山(1904)が地震記事の採録に用いたのは、内閣文庫本「異本塔寺長帳」そのものではなくて、この系統の別の写本だつた可能性もある。ちなみに、内閣文庫本の最奥の識語によれば、水戸彰考館に「八幡宮略記長帳」10冊があり、その第三~七巻は内閣文庫本の第三~七冊と全く同文という(ただし、「国書総目録」によれば、彰考館本は1945年の戦災で焼失した)。

§4. 「塔寺八幡宮長帳」

さて、次に、内閣文庫本「異本塔寺長帳」第三冊によつて、田山(1904)と武者(1941)に収録された問題の震害記事を検討しようと思うが、それにあつては、「塔寺八幡宮長帳」という別の記録のことを知っておく必要がある。

この記録は、原本が心清水八幡神社(塔寺八幡宮)に所蔵されていて、重要文化財に指定されている。この八幡宮では、少なくとも14世紀中頃の南北朝時代から16世紀末の安土桃山時代まで、毎年正月に神前で大般若経・仁王経・五部大乘経を誦読して一年の平安を祈る行事が続いていたが、「塔寺八幡宮長帳」は、基本的には、その巻数・配役や布施のことなどを毎年記録して、長々と貼り継いでいつたもの(巻数書)である。この巻数書は、北朝貞和6年(北朝観応元年、1350)から天正3年(1575)までが、多少の欠失年を除いて、大部分残っている。

これらの巻数書の裏には、年によつて、その時々に見聞した出来事が記されている(裏書)。

この裏書は、古い時代にはまばらで記述も簡単であるが、応永年間(1394~1427)頃からは頻りに書かれるようになり、記述も詳しくなっている。その内容は、はじめのうちは神社や祈禱に関することが主だったが、時代がくだるにつれて、地方の戦乱、社会情勢、災害、収獲のことや、伝え聞いた鎌倉や京都の変事も含むようになった。天正4年(1576)から文禄4年(1595)までは原本は一切残っていないが、文禄5年(1596)からは、本来の巻数書がなくなつて、従来の裏書に相当する記事が紙の表に書かれた形で残っている。途中欠けている年があるが、最後は江戸時代初期の寛永12年(1635)である。これらの裏書も、ごく一部の例外を除いては、巻数書同様その時々記された共時史料である。

このように、「塔寺八幡宮長帳」原本は、奥羽・関東地方の中世から近世にかけての貴重な史料であり、特に八幡宮とその周辺地域に関しては信頼性の高い一等史料といえる。したがって、後世の編纂物である「異本塔寺長帳」の塔寺八幡宮に関する記事は、まず何よりもこの「塔寺八幡宮長帳」原本に照らして批判されるべきであろう。

この記録は、その史料価値と特異な名称のために江戸時代から世に知られ、いくつかの写本が伝わっている。また、「会津風土記」・「統群書類従」・「史籍集覧」などの地誌や叢書類にも取められていて、現在活字本で見ることができる。ただし、それらはいずれも裏書だけをまとめて「塔寺村八幡宮長帳」・「塔寺長帳」・「塔寺日記」などと称しているもので、原本の本来の姿を伝えてはいなかつたが、昭和33年(1958)に、塔寺八幡宮長帳刊行会によつて「会津塔寺八幡宮長帳」[是沢(1958a)]が刊行され、これに原本の表裏全部の影印が掲げられ、散逸した部分も可能な限り補われたので、この記録の全容を知ることができるようになった。なお、以上の説明には、この本に付された解説[是沢(1958b)]と貫(1961)とを参考にした。

§5. 地震記事の吟味

さて、内閣文庫本「異本塔寺長帳」第三冊の永享五年癸丑(みずのとうし)の条には、まず、八月廿五日大彗星出ルとあり、続いて田山(1904)や武者(1941)に掲げられているのと同じ次の記事がある(句読点は筆者がつけた、以下同じ)。

九月十六日、日本国大地震。相州大山仁王首震落テ遙谷底入。凡神社仏閣上天公卿民家至迄家倒、山崩水ヲ塞谷ヲ埋、死者多。于時、会津塔寺邑正八幡宮、御宮殿廻廊拜殿宝蔵花表、凡不残震倒。

ただし、田山(1904)と武者(1941)は、上記の“于時”を“十時”と書き、わざわざ“(此カ)”と注記しているから、§3で述べたように、同じ系統の別の写本を用いたのかもしれない。内閣文庫本にはさらに次の記述が続くが、それは田山(1904)にも武者(1941)にも収録されていない。

小川庄高出邑嶺寒寺、右ノ地震ニ山崩埋、寺、其後永正年中今地ニ建ル。旧跡ヲ今日寺内。

小川庄高出(たかいで)邑とは、現在の新潟県東蒲原郡上川村日野川(Fig. 1参照)にあり、嶺寒(れいかん)寺は、「大日本寺院総覧」[堀(1916)]によれば、文治2年(1186)の創立で永正11年(1514)に再興されたが明治42年(1909)に焼失したという(地震のことは見えない)。また、文化6年(1809)成立の「新編会津風土記」は、“(前略)旧は此より東五町計

にあり、(元弘・建武(1331~1335)の頃の後)いつの頃にか地震して寺後の山崩れ、堂宇悉く頽転す。永正十一年此所に寺を建立し、明呑と云僧を中興とす”と述べている。

次に、永享六年甲寅(きのえとら)の条には、

二月ヨリ会津塔寺邑八幡ノ御普請始。

とあり、永享七年乙卯(きのとう)の条には、

会津塔寺邑八幡ノ造営、不残成就、十月也。依霜月初卯日遷宮、供養導師ハ新田能化三位阿闍梨経順少僧正、願主ハ黒川大守葦名三郎左衛門尉盛久。

とある。これらも、田山(1904)にも武者(1941)にも採録されていない。

以上の記述を通読すると、いかにも永享5年9月16日の地震で塔寺八幡宮が全壊して再建され、またこの地震の被害が広範囲におよんだようにみえる。しかし、「塔寺八幡宮長帳」原本(永享年間初年より11年まで連続して残っている)[是沢(1958a)]に照らしてみると、実は、これらの記述には次のような重大な問題点がある。

1. 原本の永享5年の巻数書には裏書がないが、永享4年の巻数書の裏に、次のような永享5年の記事がある(□は欠字)。

永享五年癸丑十月廿三日
新宮殿多年弓箭依越後国ニ
居住数年経却小河荘打入城□
無幾程町腹切共人数三河殿尾張□
新宮殿兄弟打死数十人
其時タイシヤウ伊与守申也其後会□
豊饒也

地元の戦乱は八幡宮の関係者にとつて大きな関心事であつたために、このように記録されたのだろうが、もし、塔寺八幡宮が永享5年9月16日に大地震で大きな被害を受けたのなら、そのことを何も書かずに約1か月後に戦乱のことだけを書いているのは大変不自然である。また、最後の文章は、恐らく“その後会津豊饒なり”だと推測されるが、もしそうであれば、この地方が大震災などとは無縁だつたことを思わせる表現である。

2. 原本には、永享6年正月と永享7年正月の巻数書が、特別な注記も裏書もなく、例年と全く同様に記されている。毎年巻数書が、前年中に予め準備されたものか正月の行事終了後に記録されたものかはよくわからないが、いずれにしても、この二年の巻数書があることは正月恒例の神前の行事が行われたわけであり、永享5年9月に大地震で八幡宮が全壊し、復興したのが永享7年11月だということは、調和しない。

3. 原本には永享6年の裏書はないが、永享7年の巻数書の裏書に、“永享七年乙卯二月四日”の日付で京都比叡山延暦寺の衆徒が根本中堂を焼いたことを記した後に、次のような記事がある。

永享七年乙卯十一月初卯
八幡宮ウハフキノ料足百貫文ニテ
修理畢、供養導師アラタノ能化
願主権大夫
永享八年丙辰三月二十七日

鳥居男柱修理, 願主権大夫

永享7年11月の初卯の日に八幡宮の何らかの修理が終つて“アラタノ能化”によつて供養が行われたことは、「異本塔寺長帳」の記事と一致している。しかし、この裏書では“うわぶき”(屋根葺)の修理が終つたためとされており、しかも約4か月後の永享8年3月には鳥居の一部を修理したことが明記されている。これは、大地震で八幡宮のすべての建造物が倒壊してしまつたものが永享7年11月に残らず再建されて遷宮が行われたという「異本塔寺長帳」の記述とは、大きく異なるし矛盾もしている。また、応永21年(1414)の裏書に遷宮次第が詳しく書かれているが、もし「異本塔寺長帳」の記すところが本当であれば、永享7年の裏書にももう少し何か記録されただろうと思われる。このようなことから、永享7年11月に完了した修理は、むしろ、建物の維持のための通常の修理・葺替だつたとみなすべきであろう(屋根の葺替は一般に20~30年毎に行うものであり、上葺の記事は長禄2年(1458)の裏書にもみえる)。このことは、また、建物の倒壊などがなかつたことを示唆しているわけである。

以上の3点にみるように、「異本塔寺長帳」が伝える永享5年の塔寺八幡宮の地震被害に対して、一等史料の「塔寺八幡宮長帳」原本は、単に裏付けを与えていないだけでなく、これと相反する事実をいくつか提供している。したがつて、「異本塔寺長帳」が信頼性の低い後世の編纂物であることも考慮すると、この地震被害は、事実ではないと判断される。

§6. 結論と付記

前節の検討の結果、永享5年会津地震の唯一の根拠である塔寺八幡宮の地震被害が否定された。したがつて、今後確度の高い新史料が出てくれば話は別であるが、現時点では、永享5年9月16日(1433年11月7日)の会津地方の地震は、削除するのが妥当だと結論される。

前節で紹介した記事から、元弘・建武の頃以降永正までの間(約1330~1510頃)に、嶺寒寺を押し潰した地震があつた可能性は残るが、それはまた別の問題である。そのような未知の歴史地震は日本全国到所に存在の可能性があるのであつて、そういう可能性をノイズのような史料に結びつけて永享5年会津地震を保留しておくとしたら、無意味であるばかりか、より大きな誤りのもとになる恐れがある。ちなみに、「塔寺八幡宮長帳」原本裏書には、上記期間中の地震として、永享8年(1436)“七月九日申剋、大地震動、日夜三日也、十六度動也”、延徳5年(明応2年、1493)“林鐘(陰曆六月)廿六日夜半、天地震動シテ、大雨降、山野崩テ、耕作流失テ”(これは雷雨かもしれないが、それでも嶺寒寺を押し潰した災害の候補にはなるだろう)などが記されている。

なお、「異本塔寺長帳」系統の写本は、前述のように、(少なくとも古い時代に関しては)史料価値が低いのだが、地震記事が多いために田山(1904)と武者(1941)にはかなり引用されている。しかし、その無批判な利用が地震学上の大きな誤りをもたらす危険は、本報の例にとどまらず、すでに明応7年(1498)の東海沖大地震[石橋(1980)]や慶長19年(1614)の地震[萩原・他(1980); 山本・他(1982)]の例でも示されている。十分注意すべきであろう。

謝 辞

原稿を読んで御注意を下さつた東京大学史料編纂所の山本武夫教授に深く感謝致します。

文 献

- 萩原尊禮・山本武夫・松田時彦・大長昭雄, 1980, 慶長十九年(1614)越後高田地震への疑問—震域の再検討, 地震学会講演予稿集, No. 1, 39-40.
- 堀 由蔵(編), 1916, 大日本寺院総覧(復刻版を1974年に名著刊行会が発行).
- 石橋克彦, 1980, 東海地震の長期的予測に関するコメント, 地震予知研究シンポジウム(1980), 123-125.
- 活断層研究会(編), 1980, 日本の活断層—分布図と資料, 東京大学出版会.
- 是沢恭三(編), 1958a, 会津塔寺八幡宮長帳, 塔寺八幡宮長帳刊行会.
- 是沢恭三, 1958b, 会津塔寺八幡宮長帳に就いて, 会津塔寺八幡宮長帳, 塔寺八幡宮長帳刊行会, 8-30.
- 武者金吉, 1941, 増訂大日本地震史料, 第一巻, 文部省震災予防評議会.
- 武者金吉(編), 1950~1953, 日本及び隣接地域大地震年表, 震災予防協会.
- 貫 達人, 1961, 会津塔寺村八幡宮長帳, 群書解題, 第八巻, 統群書類従完成会, 257-258.
- 大森房吉, 1913, 本邦大地震概説, 震災予防調査会報告, 第68号乙.
- 大森房吉, 1919, 本邦大地震概表, 震災予防調査会報告, 第88号乙.
- 田山 実, 1904, 大日本地震史料(甲巻), 震災予防調査会報告, 第46号甲.
- 東京大学史料編纂所(編纂), 1972, 1973, 1974, 1975, 1977, 1979, 編脩地誌備用典籍解題, 一~六, 大日本近世史料, 東京大学出版会.
- 東京天文台(編纂), 1981, 理科年表(昭和57年), 丸善.
- 都司嘉宜, 1979, 東海地方地震津波史料(I・上巻), 防災科学技術研究資料, 第35号.
- 宇佐美龍夫, 1975, 資料日本被害地震総覧, 東京大学出版会.
- 山本武夫・大長昭雄・萩原尊禮, 1982, 慶長十九年の越後高田地震, 古地震—歴史資料と活断層からさぐる(萩原尊禮編著), 東京大学出版会, 第12章, 186-202.